

奥三河の毛バリ相伝

明治から大正に変わろうとする頃の三代にわたる毛バリ相伝である。

塩の町

愛知県の奥三河に足助あすけという小さな町がある。巴川と足助川が合流し、そこに開けた町中を足助川に沿って中馬街道が通っている。街道の通りを挟んだ一隅に数軒の塩問屋が軒を並べていて、行き交う人の往来は足助が塩の町として栄えていることを物語っていた。

しかし、まもなく名古屋から中津川をへて塩尻につながる中央線が開通するという話が足助にも伝わるようになり、そうなれば塩の町としての繁栄がなくなることは目に見えていて、今の勢いがやがて影をひそめることを町の人たちは薄々と感じていた。

山間の地に塩の町。塩の町は矢作川と巴川の船運により成り立っていた。江戸の昔から南信州は三河の塩に依存している。矢作川が三河湾にそそぐところの吉良は塩田で栄えた町である。吉良の塩を積んだ船は矢作川を上り、巴川に入り、足助まで塩を運んでいた。足助から

は馬の背に振り分けられ、中馬街道を北上し、飯田に抜け、伊那街道をさかのぼり塩尻まで運ばれていた。塩の着くところが塩尻である。

足助の町から中馬街道を北上し、伊勢神の峠を越えたところに段戸川どがわが流れている。源である段戸山は水系を分ける山である。降った雨が西に流れれば矢作川、東に行けば豊川の水になり、ともに三河湾に注ぐ。段戸山の山塊は深いブナの原生林におおわれていて、ブナ林からの水も段戸川の一滴となっていた。

段戸川の奥の奥、ブナの原生林を切り開いた開拓地が宇良谷うらだにだった。そこには開拓に入った数軒の家があり、その一つがこの物語の主人公、鈴木雨男あめおの家である。

宇良谷は愛知県でも冬はこのほか寒いところだった。ときどき降る雪よりも、山陰で日の射さない底冷えのする厳しい寒さによるもので、それだけに春の訪れはひときわ待ち遠しいものだった。

宇良谷

足助の町の賑わいも宇良谷には遠い地のことで鈴木の家も日々、生きるのに精一杯であった。明治天皇が崩御され、元号が大正になるらしいという話を雨男あめおが聞いたのは崩御されてみつきあまり過ぎた頃である。電気もないランプの灯りが頼りの暮らしでは噂が伝わるのもず

つと後であった。

雨男あめおは今年一六歳である。宇良谷の貧しい農家、鈴木の家せがれのせがれである。背丈はすでに父親を越えていた。日頃の百姓仕事で日焼けした顔から白い歯がのぞき、輝くような肌と、胸から肩にかけてがっしりした筋肉が健康な若者を物語っている。

雨男は小学校を出るとすぐに親の野良仕事の手伝いをするようになった。下に三つ違いの弟がいた。弟の名前は晴男はるおだった。自分は雨なので弟は晴れにしたのだろうと思っていた。晴男も小学校を出たばかりである。百姓仕事を手伝い出したが、百姓を継ぐのは長男の定めである。俺もこの宇良谷で親の後を継ぐことになるのだろうと思っていた。た。

宇良谷の田畑でんぼたと言えばブナの原生林を開いて作った小さな田んぼと、わずかばかりの野菜畑、それに一頭の馬がすべてで、それだけで一家四人がしがみつくように暮らしていた。

大多賀までは電気が来ていると聞いてはいたが、さらに奥深い宇良谷の暮らしはランプとロウソクであった。朝は遅く、日暮れも早い山の狭間は、陽が射すのは昼間だけで日が傾けば暗くなるのも早い。

夜はランプの明かりが頼りである。暗いランプの下で父親は縄をなったり、母親は縫い物をしてわずかな手間賃だが家計の助けになるようにと夜も働きづめだった。雨男は働いても、働いても貧しいこんな

暮らしからいつかは抜け出したいと思っていた。

そんな宇良谷の暮らしであったが、どこかに楽しみを見いださなければ人は暮らしていけない。

父親の名は竿次かんじだった。なぜ竿次なのか雨男は聞いたことがなかった。宇良谷で生まれ、宇良谷で生涯を終えるのだろう。歳は四十を少し越えた頃であったが髪には白いものが混じり、脂っ気のない日焼けした顔には深い皺がきざまれている。口数が少なく、うつむき加減の姿勢のうえに、いつも下に目をやるクセが日頃の仕事の厳しさと、先の見えない暮らしぶりを物語っているようである。

母親の名前は幸さちだった。親はわが子の幸せを望んでつけたのだろうが、幸せとは遠い暮らしである。竿次より二つ年下の母親は働きものだったが竿次にもまして口数の少ない人だった。それゆえ家は火が消えたようで、会話らしい会話や団らんもなくそれも宇良谷の暮らしを寂しいものにしていった。

アメだ

そんな竿次の唯一の楽しみが毛バリだった。気晴らしということもあるが、釣ったアメを着に酒を呑むのが楽しみで、竿次の毛バリはむしろ酒の肴のためと言ってよかった。アメを着に安酒を呑んで田んぼ

仕事の疲れを癒やすのだった。

ときどき赤い斑点のある焼き魚が夜のおかずに出た。竿次が釣ってきたものだ。大きいのは竿次の酒の肴に、小ぶりの魚は母親と子どもである。雨男も弟もたまの魚を心待ちにしていた。竿次の毛バリで雨男の家では魚を食べることができたが、宇良谷で魚がおかずになる家はほとんどなく雨男の家は恵まれていた。あるとき竿次に聞いてみたことがある。

「なんちゅう魚だ？」

「アメだ」

竿次はアメだ、というだけでそれ以上のことは言わなかった。この魚なら毎日、小学校の行き帰りに見ていた魚だ。あれはアメだったのか。雨男には小学校の行き帰り、川を覗くのが楽しみだった。段戸川にそって細い柚道がついていて、一時間ほど下ると大多賀という集落があるが、その大多賀より少し上流に小さな建屋がある。二本の背丈ほどの石の柱が校門で、そこが雨男の通った小学校である。民家のような校舎が一つだけ。校舎の前には鉄棒が一つの小さな運動場があった。

宇良谷からは子どもの足で一時間余りかかるが、学校の行き帰り、雨男を先導するようにうさぎや狐が出るのはいつものことで特段驚くこともなかった。

宇良谷から通う子どもはわずか三人である。春になれば山菜は道端にいくらでもあったが誰も採らない。奥深い宇良谷まで採りに来る人はほとんどなく、ふんだんにある山菜も子どもにとってはただの草にすぎなかった。

子どもにとって嬉しいのは草より腹の足しになる実である。ヤマブドウやアケビを採りながら帰る秋の道草は、雨男にはなにより楽しいものだった。

とりわけ段戸川を覗く楽しみが雨男にはあった。学校の行き帰り、あとの二人を先に行かせて雨男だけが決まって足を停める場所があった。そこは宇良谷から子どもの足で三十分ほど下ったところにある淵である。

左岸にある小さな家ほどの岩が流れをせき止め、そこから絞り出したようにドォ、ドォーと音をたてて一段落ちた先に底深い青い淵がのぞいている。

淵に落ちたひとしきりの白泡がしばらくして細い筋となり、やがてポツ、ポツと消えるあたりは、拳くらいの石と小砂利のゆるやかなかけ上がりになっていて、清冽な水を通して子どもの拳を五つほど並べた大きなアメがいるのが決まって見えた。雨男にも優に尺はあることがわかる。

淵には無数のアメが泳いでいるが、雨男にはいつもかけ上がりのそ

いつだけに目が向くのだった。ときどきユラツと動いて口を開け、また元の場所に戻る。

「食った！」

雨男にも餌を食ったことがわかった。

ときどき白っぽい羽虫が流れてくる。大きな口をあけると羽虫がすつと吸い込まれた。

アメが食ったあとには小さな波ができ、波の輪は大きな輪になりやがて消えていく。アメのうしろには数匹のアメが並んでいるが、まず先にそいつが食う。

雨男はかけ上がりのアメを見るのが楽しみの一つだった。今日もいる。それだけで嬉しい。これは雨男だけの楽しみで、魚に興味のない二人には大きなアメのことを話したことはなかった。

竿次の仕掛け

竿次が毛バリを始めるのは宇良谷に遅い春が来て、新緑の木々に藤の花がまとわりつくように咲くのを見てからで、それまで決して竿を出さなかった。

「藤が咲いたな、毛バリだ」

この頃になるとボソツと言つのを雨男は何度も聞いた。

竿次の竿は真竹をナタで切って枝を払っただけのものであるが、払った節を出刃で丁寧削っていて、竿の扱いから竿次の毛バリへの愛着がみてとれる。長さは一〇尺くらいである。

二ギリはつけない。二ギリは竹の端を斜めにスパッと切っただけの、そのまま土に刺せそうなつくりである。枝を払いそのあとを出刃で丁寧に仕上げるのに比べ、二ギリのつくりはぞんざいである。繊細なところがある反面、気まぐれな竿次の性格を竿にみることができ
る。

竿次は青竹を切っただけの竿はすぐには使わなかった。一年寝かせておいたのがいい、と雨男に教えていた。青竹は重いのと、釣っているうちにクセが出て竿がひん曲がってしまうからダメだというのがその理由である。そんなわけで軒下にはいつも二本の竿が寝かせてあった。いずれも薄茶の枯竹である。ある日

「雨男、毛バリ、行くか？」

と声をかけて来た。代掻きの終わった日である。田起した田んぼの水張りが終わり、あとは苗を植えるだけとなったからだ。はずむような声の調子で竿次の気分がいいのがわかる。

「アメか？ なら行く」

雨男はひたいの汗を拭いながらふたつ返事で返した。竿次が毛バリに誘うのは初めてだ。一緒に行きたいとは思っていたが、竿次が声を

かけてくることはなかった。

教えると言ってもちよつと歩けば段戸川である。いつでも毛バリはできるのに、なぜ連れていけないのだ思っていた雨男には、竿次が声をかけてくれたのが心底うれしかった。

「雨男、お前ももう十六だが。二十歳になりやお前も兵隊ずら。毛バ리를教たるが。兵隊にいきや、生きて帰れるかわからんからな」

竿次は軒下から竿を一本とつて軽く二、三度振って「うん！」と言った。

二人は縁側に腰を下ろした。竿次の教えは一つ、一つ丁寧だった。一つ屋根に暮らす親子である。これが今生のわかれでもあるまいし、気まぐれな竿次にしては珍しいと思いつつも竿次の言葉と手先に集中した。

竿次は弁当箱ほどの柳ごおりの蓋をあけ、黒い糸をつまんだ。竿次はゆつくり話した。

「これが道糸だ。馬素ほすつて言うんだ。うちのヨシの尻尾の毛を抜いたんだ。それを燃ったもんだ。馬の尻尾はメスがいいんだに。ヨシはメスだから毛もいいんだ。だけどよ、いっぺんに抜くと馬も痛いから一本ずつ抜くんだ。落ちている毛は弱いからダメだ」

尻尾を数本燃つて一尺半くらいにして、燃つたのを何本も結んでいる。燃る本数をだんだん少なくしてムチみたいになっているのが雨男に

もわかった。

「馬素は弱いからよく切れるぞ。切れたら、切れたのを抜いて、また燃ればいいんだ。九尺くらいがちょうどいいだに」

これが鉤素はりすだと言って輪にした半透明な糸を見せてくれた。

「ヤマムユガっちゅう虫がおるがや。蛾になったんじゃない。芋虫の奴だ。お前も知ってるだろうが。あの虫の腹をしゃくと、白い線が出るがや。ゆっくり引いてくるんだ。尺くらいは出るから、それを酢につけておくだがや。それが乾いたら、ブリキに小さい穴をあけといてそこに通して引くと鉤素ができるんだ。尺の鉤素ができれば上出来だな」

ひとくさり説明した後、

「そうだ、これ見てみる。鉤素は乾いてパリパリしとるでこのままじや使えんぞ。釣る前にしばらく水につけておいて柔らかくしてから使うんだ」

とつけくわえた。鉤素は尺くらいの長さがあればいらしい。

これが毛バリだ、と茶色い毛バリを見せた。太い軸のハリに黒い木綿糸で胴を巻いて、茶色い羽根を巻いてあるゴツイ毛バリである。

羽根をつまんで蓑毛みのげだ、と言った。羽根の径は半寸くらいある。毛バリにはすでに尺くらいの長さの鉤素が結んであった。

「ハリはどうしたか？」

「ハリはよお、叔父さんが名古屋の町に行くっていうから頼んで買って来てもらったもんだ」と言った後、

「ハリは大事だぞい」と付け加えた。

丁寧に折りたたまれた茶色い油紙の中に一〇本くらいハリが入っていた。色は黒茶である。軸が太くてがっしりしたハリで、おそらく海で使うハリなのだろう。鈎素を結びやすいようにチモトは平らに打たれていた。

「羽根はヤマドリでなきやだめなんか？」

「なんでもいい啦。家にヤマドリの羽根があったからヤマドリだ。キジの羽根だっていいんだに。今度、キジが死んでたら羽根むしってこい。メスの胸の毛がいらいらしいって聞いたことがあるぞ。鉄砲撃つ獵師はカモの羽根を持つてるから、分けてもらってもいいがや」

たこ糸で作った丸い輪が道糸の先にあった。これが乳輪ちちわだと教えてから、竿先の紐をへび口だといった。たこ糸を撚ったものだ。

「ほれ、へびの舌に似てるだろうが」

とプルプル振った。竿次は乳輪をへび口に結んで、ほどくことを何度もやって見せたあと

「ほれっ、やってみりん」

と雨男に渡した。

覚えがよく手先の器用な雨男には簡単なことで一度でできた。竿次はやさしい目をして雨男の手先を見つめていたが、小さくつなずき「それでいい」とボソツと言った。

竿次の教え

後ろについてこいと雨男に手招きした。釣るところを見せたいようだ。家を出てしばらく道を下り、雑木の藪を分けると段戸川の瀬音が次第に大きくなった。視界がひらけた先には段落ちと瀬をくりかえす流れがあった。竿次は腰のあたりで数回、手で押さえるしぐさをしてシッ！と言った。姿勢を低くしろ、声を出すなということだと雨男にはわかった。

竿次の後について川に入った。田起しの後の百姓姿のままである。スゲ笠と首には煮染めたような手ぬぐいが巻いてある。股引きとワラジのドロを川の流れが落とす。雨男は水に春のぬくもりを感じた。ワラジは生まれたときから履き慣れている。ワラジからは五本の指が出る。一六歳ではあるが、毎日の百姓仕事ですでに雨男の指はコチコチに固まって痛みすら感じないようになっていた。

竿次は猫が歩くように静かに歩いてから、膝をつき岩陰に隠れた。

雨男を振り返り、静かに歩け、ガシャガシャ音を立てるなと言った。雨男は竿次の後ろにまわり、中腰になって見守った。

初夏を思わせる陽気だった。むせかえるような緑に囲まれていた。風はない。若いウグイスのホッ、ホケツという鳴き声が聞こえた。陽が山の端に落ち、あと小一時間もすれば夕マズメの頃であった。

まだかと待つ雨男にはもどかしい時間が過ぎたが、竿次はすぐに毛バリを振らなかつた。いくらでもアメはいるのになぜ竿を出さないのか。

竿次は大物を釣る所を見せたかつた。小さくパシャッと飛沫が飛んだのが見えた。

「アメがハネた！」

と竿次が言う。顔を上げると大きなアメがゆったり泳いでいるのが見えた。そいつに釘付けとなつた途端、瀬音はもはや耳に入っていないかつた。静寂が流れている。

だがすぐには毛バリを振らなかつた。竿次は腰をかがめたまま動かない。身じろぎもせず見ている。なぜ毛バリを振らないのか？

バシャとさつきと同じ場所で同じような小さなハネがあつた。竿次が動いた。一度、確かめるように道糸と毛バリに目をやった後、寝かせた竿をサツ！と立てると、スツと毛バリを振り込んだ。毛バリは静かに、羽虫のようにポトツと水に落ちた。

毛バリがわずかに流れたそのとき、ガバツ！ともバシャ！とも聞こえる音とともに銀色の魚体が右から左へ空を跳んだ。魚体に青い印をいくつもつけ、赤い点をちりばめた魚がくつきり静止して、あたかも刻が止まったかのように雨男には見えた。

大きな飛沫をあげアメが没したわずかな後、グイツと竿を立てた。ビシッと道糸の張る音が聞こえた。

「雨男！ でかっせ」

瀬音が消えるような大きな声で竿次は言った。竿次の竿は先から三尺くらいのところからキュツと曲がっている。糸鳴がする。

竿次はほとんど動かない。河原を歩くことなく、魚の動く方へ身体を向けるだけで、時折の引き込みには立てた竿はそのままに、竿を前に出すようにして魚をあしらう。竿次の竿さばきに雨男は見とれていた。

やがて観念したように銀色の魚体が浮かんできた。弱ってきたことは雨男にもみてとれる。竿次はしもてにチラツと目をくれた。そこは砂利混じりの砂場である。グイと竿をあおり、アメの口を水から出して一度空気を吸わせた。竿を寝かせ、アメを浅瀬に引きながら、ヨッオ！というかけ声とともに一気に砂場にずり上げた。

アメは砂にまみれてバタバタしていたが、慌てることなくゆっくり歩いてアメをつかんだ。つかんだ親指と薬指の間が二寸はある幅広の

アメである。

「オスだ」

ポツリと言った。雨男を見てわずかに口角を上げニコツと微笑んだ。小さい目がより一層小さく見える。家では決して見ることのなかった顔である。

アメノウオ

砂を川の水で落としたあとグイッと差し出した。

「これがアメだ、どうだデカイだろう」

口をパクパクさせているアメにはもう暴れる力はないようだった。

「アメはアメノウオちゆうんだ。なんでアメというか知らんが、昔、親父から雨が降ると釣れるからアメノウオだ、と聞いたことがある。たしかに雨の日にゃ釣れるがや。俺も雨の日によく釣れるからアメノウオと言っただと思っただ」

「そうか、アメはアメノウオか」

そのとき雨男はピン！と来た。

「俺の名前は雨男だけど、俺はアメか？」

「そうだ。雨の日にアメが釣れるから、お前を雨男にしたんだが。アメは降る雨じゃないぞ。アメのアメだ」

なんと親父は俺の名をアメノウオから雨男にしたのか。この歳になつてやっとわかった。

なんで俺は雨男なのか。雨男という名前が嫌でたまらなかった。小さい頃、遊び仲間はアメオ、アメオと呼んでいたが、学校で雨と男の漢字を知ったところから「やーい、雨おとこ」「お前と遊ぶと雨んなる」とからかひの的になった。子どものからかひは手加減がない。

学校を出た後でも、雨男ではジメジメした男のように思われなにか、将来、雨男というだけで嫁も来ないのではと、雨男と書くたびに心が重くなるのだった。

だが竿次が釣ったアメを見て、アメってこんなに見事な魚なのかと驚いた。砲弾のように丸く、張りのある銀色のつややかな肌、エラから尾にかけてうっすらした青にも紫にも見える縦長の印がいくつも並んでいる。

なにより雨男の目を引いたのが赤い点である。赤でもなく、さりとて朱でもない点がくどくもない数でほどよく体側に散りばめられている。すべて完璧だ、アメは完璧な魚だ。

親父は俺にアメのような完璧な男になることを願ってつけたに違いない、と雨男はそのとき思ったのだった。

雨男は嬉しかった。雨男はアメノウオ。完璧な魚。それだけで前を向いて歩ける気がした。

竿次はアメを静かに川に戻した。手から放れたアメはしばらく横になつていたが、やがてゆっくり身体を起こしゆらゆらと流れに入つていった。

「大きなアメは逃がしてやれ。種になるアメはとっちゃダメだ」と言つた。

竿次の毛バリは上手かつた。それは雨男にもわかつた。接近するときの姿勢が低く、しかも水にはできるだけ入らないようにしている。一旦、場所を決めたらそこから毛バリを打てる場所はすべて打つてから動くので竿次の姿はいつとき岩になつたように見える。

「アメはな、二つ半だ」と竿次が言つ。

「二つ半？」雨男が聞き返した。

「アメはな、毛バリが落ちてから二つ半で出んだ。一つ、二つ、三つの三つの前だ。三つじゃ遅い。二つ半で出んだ。だから、三つも、四つも流しちゃダメだ。毛バリが落ちたら二つ半で出るから、そこで待つてりゃいいんだ。ほら出たつてなわけだから合わせ損なつのは少なくなんだ」

なんで二つ半なのか、竿次に聞いた。

「アメはよお 毛バリ見て、おっかけて食うのを二つ半でやんだ」

雨男にはふうんと思えなかつたが、それがアメの習性だと竿次は言っているようだ。

ポンツクの爺さん

「雨男、俺は親父から毛バリをおすかったんだ」と竿次はポツリと言った。

「爺さんから?」

雨男が生まれたときには爺さんはすでにいなかった。爺さんが毛バリをやっていたのを初めて聞いた。爺さんも毛バリをやっていたのか。

石に座れと手招きして爺さんのことを話し始めた。すでにあたりは暗くなりかけていた。雨男に毛バリを教えたことで、自分が親父から教えてもらったことを思い出し、伝えたくなったのだろう。

「俺の親父、お前の爺さんのことだ。親父は下の町の足助にいたんだ」

竿次は爺さんのことを話し始めた。

「親父は若い頃は道楽もんで釣りばっかやってたらしいが。オフクロがそう言うんだから本当だろう。足助のあたりじゃ釣りやる奴はポンとか、ポンツクって言われるんだ。遊び人、道楽もんで意味だろうな」

江戸の昔から、奥三河から信州にかけて定住しないで小屋がけしな

がら男は川漁、女は籠などを作り、町で売る山窩さんかと呼ばれる人たちがいたようだ。職漁は山窩の人たちの仕事であった。

「親父の母親だから、お前のひい婆さんになるな。ひい婆さんが言うには、親父は釣りが好きだったもんで連中と一緒に釣り歩いたりしたらしい。息子にやめてくれと何度も言ったらしいが、爺さんは面白もんで漁師半分のポンツクだったらしい。婆さんは親父のことで泣いていたな。世間からみりゃ、遊び人だもんな。親父の話ではポンツクの仲間からアメの毛バリを教えてもらったらしいな」

「どこでやってたんだ。段戸か」と聞いた。

「段戸じゃない。段戸は遠いが。足助から小一時間歩くと御内蔵連、金蔵連という集落があるんだ。その川だったらしいが。誰もやらんで、それは釣れたもんだつたと親父は言ってたぜ。四貫目入るビクを持ってたからな。結構釣れたんだな。あるとき、釣り終わって帰る道にアメが何匹も落ちている。親父は不思議なことがあるもんだと思っただそうだ。なんのこたあない、自分の釣ったアメがビクからこぼれてたんだ。そんならいアメはいるもんな。

釣った魚はその足で足助の料理屋や宿屋に持ってたらしい。足助にや大きな料理屋も宿屋もあるしな。結構、いい金になったと言っが、いつまでもポンツクじゃなかうと嫁にもらったのがオフク口だ。ところが住むところがない。宇良谷を開拓すれば土地が貰えるという話

があつたんで宇良谷に来たというわけだ」

竿次にしては饒舌だった。節目がちに訥々と話した。

「親父は宇良谷でも毛バリをやったんだ。なんせ目の前が川だもんな。性分だから止めれんわ。よっぽど毛バリが好きだったんだな。親父は俺に竿次つてつけたんだ。竿で親父のあとに続くという意味だと聞いたことがある。お前の歳ごろになったとき毛バリを教えてくれた。俺も毛バリをやってみたかったしな。今、俺がお前に見せたら。あんな風にして俺に教えてくれた。

お前に教えたのは何から何まで親父が教えてくれたことだ。俺は親父の後について何度も歩いたが、親父は自分の竿は一度も振らせてくれなかったな。竿は自分で作れと言っただけだ。だから、雨男、お前も全部自分で作れ。自分の作ったものは大事にするからな。

俺が毛バリをやるようになってから、一度だけだが親父が俺の毛バリをみてお前も一人前のポンだ、と言ったときは嬉しかったな。そんな親父も俺の歳ぐらいのときポックリ逝っちまって、あとはオフクロと二人で田んぼと畑仕事だ。苦勞したな。幸が嫁に来てくれて少し楽になったが、こんなところによく嫁に来てくれたもんだ」

竿次にそんなことがあったことを初めて知った。爺さんも毛バリをやってたんだ。会ったことのない爺さんだが同じように竿次に教えていたのだろう。

その毛バリを竿次が教えている。俺の身体に毛バリの血が流れている。身体がかすかに震え、胸のあたりがポツと熱くなるのを感じた。目を閉じると爺さんが毛バリを振っている姿がまぶたに浮かんだ。

竿次は最後にポツリと言った。

「釣れるからって馬鹿みたいに釣ったらダメだぞい。残して釣るんだ」

竿次が毛バリを始めた頃、宇良谷一帯が大雨になり、段戸川源流部がひどく荒れたことがあったそうだ。爺さんが魚を残して釣れなかったのを守ったのでアメが残ったが、釣れるままに釣っていたら、どうだったかと言う意味のことだった。

竿次も百姓のかたわら、いつときアメを大多賀まで売りにいったようだ。しかし小さな集落のためなかなかはず、かといって足助までは遠いのでいつの頃から仕事にするのはやめたようだった。

話の後も竿次は一度も竿を振らせてくれなかった。爺さんも竿次に竿を振らせなかったからだろうと雨男は思った。

足助の町へ

その夜、雨男は水面を割ってズザッと跳躍するアメの夢を見た。アッ！と思わず声が出て右腕がビクッと動いた。それがきっかけで夢か

ら覚めた。夢かあ。家族は深い眠りの中だった。俺も毛バリやりてえ。

翌朝、俺も毛バリやりたいからもっと教えてくれと言ったが、竿次はナタと出刃を黙って渡すだけだった。もう教えた。あとはお前一人やれという無言の言葉だった。

雨男は野良仕事の合間に竹を切り、夜にはランプの下で枝を払い、節をとった。ニギリは竹をスパッと切っただけの竿次の真似をした。馬素も、鉤素も見よう見まねで作った。竿次からハリを一本もらい胴を黒い木綿糸で、蓑毛をヤマドリで巻いた。ハリを渡すとき、ボソツと「大事にしろ」と竿次は言った。

ときどきチラツと見るだけで竿次は一切、口を挟さまなかったが、竿はまだ使っちゃ早い、来年だぞ、という意味のことを言った。川での饒舌が家では別人のように無口であった。

弟の晴男も学校を出て野良仕事の手伝いができるようになったので、兄弟二人して夜は縄なえの仕事をした。竿次は縄なえの手を止めることなく、聞こえるかどうかの声で毛バリのことをポツポツと話した。雨男に話しているようであり、晴男に向けているようでもある。こすいアメの話とか、毛バリの振り方、合わせなど同じ話を夜ごと話すので、雨男には毛バリのすべてが頭に入っていた。俺に毛バリのすべてを教えたいという竿次の気持ちが伝わっていた。

竿次は仕事の間に仕掛けをつくることだけは許していた。どっちみちあと四年もすれば兵隊にとられる。兵隊にいけば生きて帰れるかわからない。今のうちだけだ、という思いがあったからだろう。爺さんは早くに亡くなり、母親と二人暮らしだったので竿次は兵役を免除されていた。

季節は巡り宇良谷にも遅い春が来た。冬の寒さが厳しかったためかいつもの年より藤の咲くのが遅かった。

「藤が咲いた、毛バリだ」

竿次がポツリと言った。その言葉で毛バリができるぞと雨男の心は騒いだ。

ある日、田んぼ仕事が終わった夕方、雨男が軒下から竿を下ろしたのを見た竿次が「お前いくんか？」と聞いた。

「おう！」と声を残して足早に川へ向かった。その背中に「お前もポンだなあ」という竿次の声が届いた。

その日、雨男は八寸はある四匹のアメを釣った。笹にさしたアメを母親に差し出した。

「おや！雨男が・・・」と母親は声を出し、雨男がね・・・言いたいのをこらえて竿次にアメを見せた。

竿次は笹にぶら下がったアメをチツツとみて、うん！と小さくうな

ずいたが、雨男に声をかけることはなかった。

その夜は麦と雑穀まじりの飯、味噌汁と漬物だけの貧しい食卓にア
メの塩焼きがついて、会話はほとんどなかったが皆の心がほっとゆる
んだのが雨男にはわかった。

以来、野良仕事の後、わずかな時間でも雨男は竿を出して食卓をに
ぎわした。腕はどんどん上達した。毛バリは面白い。魚との駆け引き
に雨男は夢中になったが、喜ぶ家族の顔を見るのが何よりうれしかっ
た。雨男が毛バリに行くにつれ、竿次はほとんど竿を出さなくなっ
た。

そんなある日、母親から足助で塩を買うように頼まれた。足助？
一瞬、遠いなと思ったが、すぐに「行く！」と返した。足助までは一
六歳の少年の足でも下りで四時間、上りで五時間はかかる。段戸川を
大多賀まで下り、その足で中馬街道に出て伊勢神のつづらの峠を上
り、そこからは下りになるが二時間はみなければならぬ。だが足助
に行けば菓子も買えるし本も読める。宇良谷からすれば都のようなど
ころである。

母親は雨男に銭を渡した。塩の銭より少しあったのは足助で遊んで
来い、晴男に土産を買って来いという親の心遣いだった。

段戸川を下り、くだんの淵を覗いたのは何年ぶりだろうか。そっと
覗くと、

いた！

あのかけ上がりだ。待てよ、あのアメは昔のアメじゃない。アメの命は二、三年と竿次が言ってたから別のアメに違いない。

以前のアメよりずっと大きいように見える。それにしてもまったく同じところについて、同じようにゆったり餌を食っている。アメのつくところは同じなんだな。よし、足助から帰ったらこいつを毛バリで釣ると決めた。

雨男が足助に行ったのは小学校の遠足以来である。行き交う人の多さにただただ驚き、うろろろするばかりだった。入り組んだ小路の万屋よろいで家族の土産にたんきりアメと塩まんじゅうを、晴男には「日本少年」を買った。

対峙

その日は、代掻きも終わり田植えを待つだけの日だった。三時ごろには仕事も終わったので、竿次に一言、行ってくると言葉を残して段戸川を下った。竿次は目で追っただけで、いつものことで声はかけなかったが、太めの竿を持っていった雨男に心が動くものがあった。

初夏を思わせる陽気で、気持ちのいい南からの風が雨男の足どりを早くした。色とりどりの緑が雨男を包むようであったが、雨男の眼中

にはなかった。

雨男の心は急いでいた。早く竿を出したい。次第に早足になった。淵に着く頃には額からドツと汗が吹き出していた。首に巻いた手ぬぐいで汗をぬぐった。手ぬぐいからは野良仕事の汗の匂いがした。淵についた。杣道からそつと覗く。

うるー

いつものかけ上がりでゆっくり左に右に動きながら時折、大きな口を開ける。食ってる！

時々、ゆらつと水面に出て白っぽい羽虫を食って、また戻る。下に流れた羽虫を追ってアメも下る。そんなとき、自分と目が合うのでなにかと思わず首をすくめる雨男であった。

淵から少し下流の浅瀬に下りた。笹や折れた枝が股引にからみ、ワラジの足にまわりつくが、雨男の足はそんなことで傷つくようなやわな身体ではもはやなかった。まだ冷たい川の水が足のドロを流していた。

もう何回も毛バリを振っているので手順はわかっている。仕掛けは竹の筒に巻いてある。まず、へび口に乳輪を結ぶ。だが、こきざみに手が震えてうまく結べない。輪がへび口に通らないのだ。落ち着け！ ゆっくりやれ！ 雨男は何度も声を出して落ち着こうとした。心臓の

鼓動が早い。早鐘のようにドクドク打つ。落ち着け！

やっと結べた。スルスルと道糸、つぎに鉤素、毛バリを出していくがバリバリしているので一度、水に馴染ませなければならぬ。

雨男はしばらく道糸と鉤素、毛バリを水につけておいた。蓑毛はいつものヤマドリだ。この間にも心臓の鼓動は収まらなかった。足がフワフワして自分の身体ではないようだ。水の冷たさも感じなかった。口が渴いている。片手で水をすくって飲んだ。

雨男は一度、大きく息をした後、二ギリをもってビシッと竿を一振りした。ビシャビシャと上がった飛沫が霧のようになって消えていった。霧の中に小さな虹が見えた。

いよいよだ。でかいアメはこすい、が竿次の口ぐせだった。アメはこすいから姿みせちゃだめだ、腰を落とせ、音を立てずに歩け、水に入るな。

雨男は腰を落とし、にじり寄るようにして淵に近づいた。左手に身を隠すに手頃な岩がある。そこにそっと身を寄せて顔をあげ淵を見た。よし、アメは気づいていない。

毛バリを失くすなと竿次はくどく言った。アメはいくらでいるが毛バリは大事だぞ。木に引っかけてたらなんとしても取ってこい。

毛バリを木にかけないか周りを見渡した。竿は一〇尺、仕掛けも一〇尺。二ギリの端にちょうど毛バリがある長さだ。

毛バリと鉤素をクンクンと軽く引いてチモトがしっかり結ばれてい

ることを確かめた。竿次がやったように竿と仕掛けを横に倒した。こ
すいアメには竿をみせちゃダメだ、一回で振れという竿次の教えであ
る。

顔をそつと上げてかけ上がりを見た。相変わらずゆらゆら動いて餌
をとっている。羽虫を食った！ 今、毛バリを落とせば食う！と思っ
たが、待った。

雨男は竿次が初めて毛バリを教えてくれた日のことを思い出してい
た。アメが羽虫を食ってもすぐに毛バリを振らなかった。もう一回、
羽虫を食うのを待ってから毛バリを振ったのだ。そうか、あれば羽虫
を食うに間合いがあるからだ。間合いを計るためにすぐに毛バリを振
らなかったのだ。

雨男は待った。また羽虫を食った。羽虫を食う間合いがわかった。
改めてニギリを握り直した。ニギリは手の平の汗でベタベタしてい
た。

雨男は流れの筋とアメが羽虫を食っている場所を確認した。白泡が
やがて細い白い筋になりポツポツと泡に代るところである。よく見る
と底石で小さく二つに分かれた流れが再び集まる筋でアメは食ってい
る。あそこにいれば目の前を餌が流れてくる。

わかった。雨男はサツと竿をたて道糸を小さく後ろに振り上げた。
道糸がピツと後ろで張るわずか前にニギリを軽く前に倒した。馬素は

細いムチのように飛んで毛バリを運んだ。

毛バリは静かに水に落ちた。毛バリが筋に乗ってわずかに流れたとき、アメもスツと浮き上がって食う体勢になった。食え！ 食え！ 二ギリを持つ手に力が入った。心臓がドクン、ドクンする。

食え！まさに毛バリがアメの口に入る寸前にアメは食うのを止めたのだ。スツ沈んで元の場所に戻った。

あ！どうした。食うと思ったのに。なぜだ。雨男は毛バリを引き上げた。

筋を流せ

なぜだ？なんで食わない。こいつはこすいアメだ。アメが毛バリを食わないわけを竿次が教えてくれたことはなかった。なんでだ。毛バリのつくりが悪かったのか？ いやそんなはずはない。これまでもこの毛バリでアメは騙されてきたんだ。

なぜなのか雨男は岩に隠れてしばらく考えていた。アメは毛バリがわからない意味のことを竿次が言ったことがある。

「あいつら目が悪いで、細かいところはわからん。虫らしけりゃいいんだ」

そうか毛バリのつくりが悪かったんじゃない。ならなんだ。雨男は

竿次の言葉を思い出そうとしていた。そう言えば親父は筋、筋、筋が大事だと言っていたな。「筋を流せば食うだ」と。

わかった。そうか！アメが寸前で食わなかったのは筋をはずれて流れたからだ。毛バリは筋だ。筋を流せば食う。しかし、どうやったら筋を流れるのか。鉤素をピンと張ったら毛バリが筋をはずれるから鉤素を緩めたらいいんじゃないか？と思った。絶対そうだ。そこに違いない。今度は絶対釣ってやる。

再びかけ上がり目をやった。アメは何ごともなかったようにゆらゆらと右、左に動いてときどき口を開けている。

よおし、今度こそだ。雨男は竿を倒してから、流れの筋と毛バリを落とす場所を確認した。頭の中で筋だ、鉤素を緩めるんだと唱えた。

また鼓動が早くなった。

毛バリはストツと水に落ち、筋に乗って流れた。出る！ 出るぞ！

アメがスツと浮いて大きな口を開けた。食え！ アメは静かにスポツと毛バリを吸い込んだ。茶色い毛バリが雨男の視界から消えた。

食った！ 雨男はグイと竿を立てた。一旦沈んだアメの頭が水に出てバシャツと激しい飛沫が飛んだ。やった！ でかい。ずしりとした重みが竿から伝わってくる。ギューンギューン糸鳴りがする。絶対ばらしちゃなんないぞ。

アメは淵の中にグイグイ潜ろうとする。これはいかん。アメについ

ていくしかない。無理に引つ張れば鉤素が切れる。竿を立てる。竿を寝かしたら鉤素が切られる。竿を立てたままアメの後を追って数歩歩いた。絶対に潜られちゃならんぞ。鉤素が石で切れる。雨男の頭には竿次の教えやら自分の思いつきがグルグルとまわっていた。時間にして一分か、二分、あるいはもつと長かったかもしれない。

糸を切ろうとしてアメがクルクル回るたび水の中に銀色が流れる。少しずつ浮いて来た。背中の黒い斑点が目に入る。こいつはでかい。取り込みにかかるうとしたが、振り込む前にどこに取り込むか考えていなかった。

下流にチラツと目をやるとかけ上がりのしもては一段の段落ちになっていてそこから早瀬がしばらく続く。瀬に入られたらやっかいだ。

どうする。淵で取り込むか、一段落とすか。どうする。淵なら近くまで木や竹がせり出しているから、下手をすると道糸をからませる。

雨男は思いのほか冷静な自分に驚いた。淵で取り込むことに決めた。さしものアメも弱ってきた。それまでは雨男を引き回していたが、雨男が竿を引けば身体の向きが変わるようになってきたからだ。

ググツと引き寄せた体側にあざやかな朱点がみとれた。取り込むぞ。玉砂利ほどの石でできた二畳ほどの広さの右岸に向けて竿を倒し、アメを誘導した。アメが横たえときに一気に抜くしかない。

「ためらったらダメだ」と口に出した。玉砂利のきわまで寄せて、

よお！と声を出してアメを抜いた。竿次がしたように。

アメは乾いた石の上でビトン、ビトン跳ねている。口からは毛バリで傷ついた血が出ていた。雨男は親指と小指を広げ、アメに手を添えて長さを測った。「尺五寸だ！」と雨男は声に出した。

手につかんでじつとアメを見つめた。上あごが下あごを覆うように出ている。歯が鋭い。体側のうす紫の印は乱れた模様となっていて、しかもうつすらとしか見えない。竿次のアメより一回り大きいオスだ。完璧な姿をしたオスだった。この川の主かもしれないぞと雨男は思った。

まだ息がある。雨男はハリを外して両手でやさしくつかみ水際に運んでそつと流れに入れた。アメは手の中でゆっくり身体を起こしパクパクと何度もエラを広げた。アメ色の背にポツポツと黒い斑点が見えた。静かに両手を離れた。アメは二、三回大きく尾びれを振ると、ゆっくり、ゆっくり淵の中に消えていった。

雨男はアメが消えた先を見ながら「これでいい」とつぶやいた。あのアメは俺だ。死なせちゃなんない。生きる！

雨男はアメ。アメは俺だ。薄暗くなった帰り道で雨男は何度も声に出して言った。目をつむればアメが毛バリを吸い込んだ瞬間が見える。耳にはビンビンと響く糸鳴りが聞こえる。ギョツと手を握ってみた。アメの強い引きが手に残っている。

ああ、俺はあのアメを釣ったのだ。あのアメを釣ったことで男としての自信が静かに沸いてくるのを感じていた。それは家が近くなるにつれある思いに繋がっていった。

家に帰った雨男に釣れたか！と竿次が声をかけた。雨男は大きくうなずいて「おう！」とだけ返した。その声の大きさに雨男がでかいアメを釣ったとわかったが、それ以上何も言わなかった。

ブナ林に埋もれて

春が終わり、田んぼの稲が一只ほどに育ったとき雨男は家を出た。

竿次も母親も止めはしなかった。雨男はアメだからと竿次はボソツツと言った。

このまま宇良谷で一生涯らすことはできない。俺はアメだから。雨男の強い意志だった。宇良谷では雨男が足助に出たとも、名古屋に行ったとも噂したが竿次は何も言わなかった。

雨男は名古屋の親戚のついで堀川端の魚問屋の丁稚になっていた。仕事はつらかったが三食白い飯が食べ、電気も水道もある暮らしは極楽のようだったと述懐している。

そこでアメノウオを鯨あめおと書くのを知った。そのとき鈴木鯨男と改名してゐる。

二〇歳で兵隊にとられている。名古屋第八歩兵連隊に入営し、二等兵で満洲に派兵された。時代は日本の海外進出の頃で、部隊はシベリア派兵にともない満洲に駐屯している。ソ満国境の監視が任務である。冬の極寒のソ満国境の監視は死を覚悟する日々だったという。

満洲の荒野を流れる川にはタイメンがいた。魚問屋にいたことから隊長から魚の補給を命じられていた。タコ糸に結んだハリに肉をつけ、投げておくだけで簡単にタイメンが釣れた。大きなものになると綱引きのような釣りだったと言う。手榴弾を投げてとったこともあるという。

魚を捌くのはお手のもので、鯨男の魚は軍律厳しい部隊にしばし困らんをもたらした。上等兵のうけがよかったのも魚のおかげだったと語っている。

二十四歳で兵役を終えた鯨男は、夜も昼もなく働き、四〇を前にして念願だった川魚問屋を岐阜の柳ヶ瀬に開いている。商いは長良川の鮎とウナギ、それとアマゴが主であるが岐阜のナマズ、津島の川魚など、川魚なら何でも扱ったために県内一の大問屋となっている。鯨男の店ではアマゴはアメか、アメノウオと呼ぶように店員に徹底させていた。

病を得て戦後まもなく五五歳の若さで亡くなっている。今は孫が柳ヶ瀬の店を継いでいるが、この店では今もアメか、アメノウオで、ア

マスとは呼ばない。

今、宇良谷の雨男の家は永い年月で朽ち果て、小さな茶碗などのかけらが、ここにかつて人が住んでいたことを語るのみである。

鯨